

## 2 文節の働きと相互の関係

(1) 主語・述語

①何が どうする(動作・作用・存在)

「日が 沈む。」「彼は 走る。」「彼女も 走る。」「本が ある。」

②何が どんなだ(様子・状態)

「海は 青い。」「朝顔も きれいだ。」「頭が 良い。」

③何が 何だ(名前・役割分担・所属グループ)

「彼は 弟だ。」「それも うそだ。」「僕だって 人間だ。」

注 A 象は 鼻が 長い。 B 私 は 水が 飲みたい。

④の文では、「象は」を題目語・総主語、「鼻が」を部分の主語と呼んで区別することもあるが、主語が二つあると考えてよいだろう。⑥の文では、「水が」を対象語(目的語)と呼んで主語としたり、「水を」に置き換えられるために修飾語としたりする考え方があがるが、主語にするにせよ、修飾語にするにせよ、「水が飲みたい」を述部とすることに変わりはない。

(2) 修飾語(修飾・被修飾の関係)

①「どのように・どのくらい・何を・誰に・誰と・何で・誰から・どこまで・いつ」を表す修飾語。

「雨が しとしとと 降る。」「性格が 極めて 穏やかだ。」「父と 話す。」「駅に 行く。」「本を 買う。」「紙で 作る。」「兄から 借りる。」「朝、 出発する。」

注 述語を修飾するというよりも、述語の文末に一定の述べ方を要求する誘導語とも言べきものも、この種類の修飾語と

されている。

「たぶん 来るだろう。」「まるで 雪のようだ。」「たとえ うそでも いい。」「決して しない。」「どうか 話して ください。」

②「どんな・何の・誰の・どの・どうする」何を表す修飾語。

「美しい 女性が 現れる。」「先生の 顔は 大きい。」「質問する 人が いない。」「この 問題は 易しい。」

注 ①のような修飾語を連用修飾語、②のような修飾語を連体修飾語という。

花が 美しく 咲く。(連用修飾語)  
美しい 花が 咲く。(連体修飾語)

(3) 接続語(接続・被接続の関係)

①単語の接続語(文節と文節、文と文を接続する)

彼は 暑さ および 寒さに 強い。

外は 寒かった。しかし、私は 出かけた。

②原因・理由や条件・前提などを表す「ので・が・ば・でも」などの単語が付いた接続語(下のいずれかの文節に関係するといふよりも、下の部分全体に関係するといったほうがよい)

寒かったので、行かなかった。

寒かったけれど、出かけた。

疲れたが、走り続けた。

静かならば、能率も 上がる。

疲れても、休まずに 働く。

泣くので、しかるのを やめた。

二つの事柄を関係づけて、理由や条件を示す。

注 ただし、次のようなものは、接続語ではない。

笑いながら 話す。  
泣いて あやまる。  
(運用修飾語)

彼は まじめだし、もの静かだ。(述語の並立)  
おもしろくて、ために なる 本だ。(修飾語の並立)

(4) 独立語

- ① 感動を表すもの。「ああ、何て きれいな 人だ。」
- ② 呼びかけを表すもの。「もしもし、林さんですか。」
- ③ 応答を表すもの。「いいえ、林では ありません。」
- ④ 提示を表すもの。(このような場合には、下に必ず、「これ・それ」のような指示する語句がある)

杉、これが 県を 代表する 木です。  
協力、それを クラスの モットーと する。

八月十五日、それは 日本が 戦争に 負けた 日です。  
このほかに、他の文節と合わさって、主語・述語・修飾語などと同じ働きをするものがある。(二文節以上を「一部」と呼ぶ)

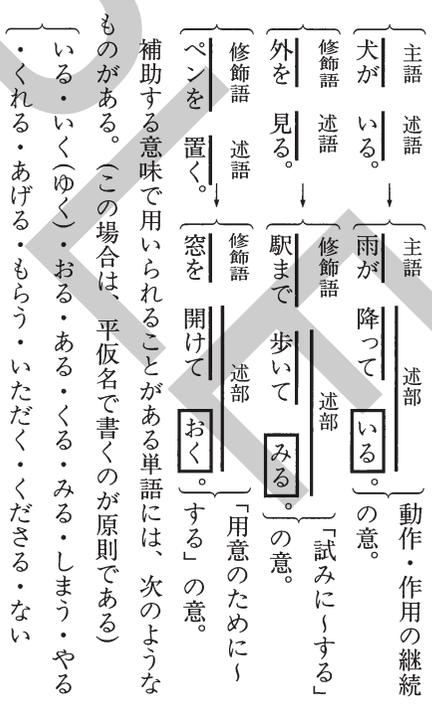
① 並立の関係にある文節

主部 太郎と 次郎は 兄弟だ。(列挙)  
修飾部 お茶か 水を ください。(選択)  
修飾部 彼は、学級委員、つまり 学級代表者になった。(換言)  
述部 湖は、静かで きれいだ。(対等)

② 補助・被補助の関係にある文節

本来の意味が薄れて、上のことばを補助する意味で用いられる

る場合。



1 次のそれぞれの文の□の述語に対する主語を一つずつ選び、記号で答えよ。

- (1) ア 君と イ 同じように、 ウ 僕も エ まじめに □ 勉強した。
- (2) ア 人間に イ とって ウ 最も エ 大切な オ ものは □ 愛だ。
- (3) ア 努力さえ イ すれば、 ウ 君にも エ チャンスが □ ある。
- (4) ア 誰ですか、 イ ここに、 ウ この 荷物を □ 置いた。 オ 人は、
- (5) ア ばかだよ、 イ 君は、 ウ そんな □ ことを □ するなんて。
- (6) ア 僕の □ 町には、 ウ 動物園だ □ 。
- (7) ア そんな □ 簡単な □ 問題なら、 エ ぼくに □ ても □ 楽に □ 解ける。

2 次のそれぞれの文の形を、あとから一つずつ選び、記号で答えよ。

- (1) □
- (2) □
- (3) □
- (4) □
- (5) □
- (6) □
- (7) □

- (1) 大空をゆっくり流れる白雲は、まるで真綿のようだ。
- (2) 彼こそクラス委員にふさわしい人物です。
- (3) 隣のおじさんも、明日、ヨーロッパへ旅立つ。
- (4) 誰も、そんなうわさを信じなかった。
- (5) ガラスを割ったのは、ぼくの弟です。

(A)	(B)		

**3** 次のそれぞれの文の、(A)主語と、(B)述語を、それぞれ一文節で書き抜いて答えよ。

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

- (1) わたしには、妹が一人います。
- (2) 彼は、懸命に勉強しようと考えた。
- (3) 彼が作った箱は、たいへんきれいだ。
- (4) 僕の父は、中学校の先生だ。
- (5) 大昔の土器が見つかった。

ア 何が——どうする。  
 イ 何が——どんなだ。  
 ウ 何が——何だ。

**5** 次のそれぞれの文の□のことがばを修飾している文節を二つずつ

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)

- (9) オ人間は□おそらく□生活する□ことは□できないだろう。
- (8) ア異様な□ア荒々しい□イ一群が、□ウ入口に□エ現れた。
- (7) □突然、□ア激しい□イ雨が□ウ降り出した。
- (6) □明日から□ア楽しい□イ夏休みが□ウ始まる。
- (5) □ある□ア野球の□イ選手が、□ウこの□エ言葉を□オ述べた。
- (4) □ふと□ア時計を□イ見ると、□ウちようど□エ十時だった。
- (3) □その□ア小さな□イピンクの□ウ花が□エひなぎくた。
- (2) □教室を□アきれいに□イかたづけろ□ウ習慣を□エつけよう。
- (1) □彼女の□アやわらかな□イ黒い□ウ髪に□エ手を□オ触れた。

**4** 次のそれぞれの文の□のことがばを修飾している文節を一つずつ選び、記号で答えよ。

(A)	(B)		
(A)	(B)		
(A)	(B)		

- (7) 林を通りかかると、一匹のうさぎが、新緑のくさむらにいた。
- (6) 手紙に書かれる事柄は、人により、用向きによって、もちろん千差万別です。

選び、記号で答えよ。

- (1) ア 豆の | イ 木は | ウ 日ごとに | エ ぐんぐん | **成長した。**
- (2) ア ことばは、 | イ 自分たちに | ウ いちばん | **似合った** | エ ものを
- オ 使いたい。
- (3) ア 僕は | イ 母の | ウ 優しい | **愛を** | エ しみじみと | オ 感じた。
- (4) ア 三人の | イ 子供は、 | ウ おそろおそろ | **押しした。** | エ いちばん | オ 端に
- (5) ア ある | **キ** | トロッコを | **ウ** | 青光りの | **エ** | する | **オ** | 星が | **カ** | 一つ | **現れ** | **た。**
- (6) ア 翌日、 | **イ** | わたしは | **ウ** | サワンの | **エ** | 姿が | **オ** | 見えないのに | **気づきました。**

(1)									
(2)									
(3)									
(4)									
(5)									
(6)									

6 次のそれぞれの文から、接続語となっている部分を一文節で書き抜いて答えよ。

- (1) ペンあるいは鉛筆を持って集合しなさい。
- (2) 疲れたので、ひと休みすることにした。
- (3) やんだから、出かけることにしよう。


7 次のそれぞれの文の——線部から接続語を六つ選び、記号で答えよ。

- ア **こ**こで、少し休むことにしよう。
- イ 兄は、またアメリカへ行くそうです。
- ウ 昨日、ようやくできあがりでした。
- エ 高いから、遠くまでよく見える。
- オ しかし、急いでは失敗するよ。
- カ ほんとうに、彼がやったのですか。
- キ 寒いので、コートを着て行きなさい。
- ク 通り過ぎた自動車が、またもどってきた。
- ケ 絵もうまいし、また、歌も上手だ。
- コ わたしは、九州にも、それから沖繩にも行った。
- サ 中学に入学した。それから二年たった。
- シ そこに板ぎれがある。それで箱を作りなさい。
- ス 僕は独りぼっちになった。それで急に寂しくなった。

--	--	--	--	--	--

8 次のそれぞれの文から、①独立語を一つずつ書き抜き、また、②その働きを、あとから一つずつ選び、記号で答えよ。

- (1) いいえ、そんなことは、いっこうに存じません。
- (2) 北上川、ここにわたしの少年時代のすべてがある。
- (3) お父さん、今日は早く帰ってきてね。
- (4) ほう、とうとうやりとげたか。
- (5) あれっ、おかしいぞ、昨日きちんとそろえたのに。

- ア 感動    イ 呼びかけ
- ウ 応答    エ 提示

(5)	(3)	(1)
Ⓐ	Ⓐ	Ⓐ
Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ
	(4)	(2)
	Ⓐ	Ⓐ
	Ⓑ	Ⓑ

9 次のそれぞれの文の——線部の文節どうしの関係から、補助・被補助の関係のものを八つ選び、記号で答えよ。

- ア ここに 本が ある。
- イ これは 本で ある。
- ウ この ペンは 先が 曲がって いる。
- エ 私の 家には 三匹の 猫が いる。
- オ しばらく 様子を 見る。
- カ もう 一度 やって みる。
- キ 彼に 勉強を 教えて やる。
- ク 子供を 大学へ やる。
- ケ 部屋を 掃除して おく。
- コ 机の 上に 本を おく。
- サ 雨が 降って くる。
- シ 留守中に 友人が くる。
- ス 雪を いただく 高山。
- セ ここで 待たせて いただく。
- ソ ここに 本が ない。
- タ これは 本で ない。


10 次のそれぞれの文の中から、並立の関係か、あるいは、補助・被補助の関係にある文節どうしを一組ずつ書き抜いて答えよ。

- (1) 子供用のプールは浅くてせまい。
- (2) いい音が出るか、ためしてみよう。
- (3) 私は夏休みに山へも海へも行った。
- (4) 閉めてある戸を開くと、本があった。


11 次のそれぞれの文の——線部の文節の働きを、あとから一つずつ選び、記号で答えよ。

- (1) ① 苦しかったが、② がまんして ③ 最後まで ④ 走った。
- (2) ① 先生、② ああ、③ 白い ④ 建物は ⑤ 何ですか。
- (3) ① 十月二十日、② この ③ 日は ④ 私の ⑤ 誕生日です。
- (4) ① さつきまで、② くつきり ③ 見えた ④ にじが ⑤ 急に ⑥ 消えた。

- ア 主語
- イ 述語
- ウ 修飾語
- エ 接続語
- オ 独立語

(4)	(3)	(1)
①	①	①
②	②	②
③	③	③
④	④	④
⑤	⑤	(2)
		①
⑥		②
		③
		④
		⑤

12 次のそれぞれの文の——線部の文節相互の関係を、あとから一つずつ

つ選び、記号で答えよ。

- (1) つばきの 花が きれいに 咲いた。
- (2) 通学する 道にも、いろいろな 花が 咲く。
- (3) すみれの 花に 心を ひかれる。
- (4) 雨だから 中止だ。
- (5) 出かせぎに 行って いる 父の 帰る 日が 待ちどおしい。
- (6) 旅行の 途中での できごとを 話して ください。
- (7) 彼は とうとう 外国へ 行って しまった。
- (8) 僕の 好きな スポーツは 水泳と テニスだ。
- (9) 寒かったけれど 出かけた。
- (10) 質問する 人が まったく いない。
- (11) 知識が あっても、教養の ない 人が いる。
- (12) 兄は 病気なので 休養する。
- (13) 人影の ない 海岸に 出た。
- (14) どこか 静かな ところで 休もう。
- (15) 彼は 若いし 元気だ。
- (16) 木が 風で 倒れて しまった。
- (17) そんな ばかな ことは ないね。
- (18) それは これが 終わってからの ことだ。
- (19) この 本は 少しも おもしろく ない。
- (20) 彼は 勉強が よく できる。
- (21) 情けないやら くやしいやら 何とも 残念だ。
- (22) あの きれいな 花は 何でしょう。
- (23) 彼女は いつまでも 泣いて いた。

13 次のそれぞれの文の——線部の主語を一文節で書き抜いて答えよ。

(21)	(11)	(1)
(22)	(12)	(2)
(23)	(13)	(3)
(24)	(14)	(4)
(25)	(15)	(5)
(26)	(16)	(6)
(27)	(17)	(7)
(28)	(18)	(8)
(29)	(19)	(9)
(30)	(20)	(10)

- ア 主語・述語の関係
- イ 修飾・被修飾の関係
- ウ 接続・被接続の関係
- エ 並立の関係
- オ 補助・被補助の関係

- (24) 白い 小さな 花を 見つけた。
  - (25) 河原に 月見草が 咲いて いる。
  - (26) 彼は 素直に 友人の 忠告を 聞いた。
  - (27) 悪くて 高いので 買わないよ。
  - (28) 私は 中学生で ある。
  - (29) 元気なら、歩きなさい。
  - (30) あき子は、子供たちを 指揮して 先頭に 立った。
- (1) 柱は家を支えるために立てたに違いないが、後にはお祈りをする人や旅人のよりかかるところになる。
- (2) はつとわれに返った私は、窓をぴしゃりと閉め、すっかり冷えてしまった体を電気毛布の下へもぐりこませた。
- (3) 昭和三十、四十年代の経済優先の社会情勢は為政者も林業者も、そして場合によっては林学者をも木材生産と いう有形的な経済行為にのみ熱中させた。